

口蹄疫の病性鑑定時における病変部位の撮影及び 画像送信方法

丹後家畜保健衛生所
○山本 稔、極山 太

【はじめに】口蹄疫の疑い事例発生時においては、病変部位の鮮明な画像を迅速に撮影、送信することが重要である。今回、暗い牛舎内の撮影を想定した撮影方法とウイルスの拡散防止を考慮した送信方法を検討した。【方法】LED投光器(20W)1台の照度を測定。撮影は投光器を照射下で Wi-Fi 機能搭載デジタルカメラ(デジカメ)を用い、画像のブレ防止のためシャッター速度優先に固定し、シャッター速度(SS)は 1/125 と 1/250 の2条件で比較。絞りは 2.0、ISO感度はオートモード、画質は 2048×1536 ピクセル、レンズ-被写体間は 30cm、オートフォーカスの条件により黒毛和種の舌、乳頭等の病変好発部位を撮影。画像は無線 LAN により送信端末のスマートフォン(docomo)へ転送後、当所のパソコンへ送信。【結果】暗室内で投光器から 1,000ルクス以上の照度を得られる距離は 70cm 以内であった。動きが速い舌は SS=1/250の方が鮮明な画像が得られ、その他は遜色がなかった。デジカメから送信端末へは瞬時に転送可能であった。管内の牛飼養2農場が docomo のサービスエリア外であったが、画像3枚(約 6.7MB)を概ね6分以内に送信可能。【まとめ】投光器の使用と撮影条件の設定により暗い牛舎内でも鮮明な画像が得られ、無線 LAN を介した衛生管理区域外の送信端末への転送は防疫上有効であった。